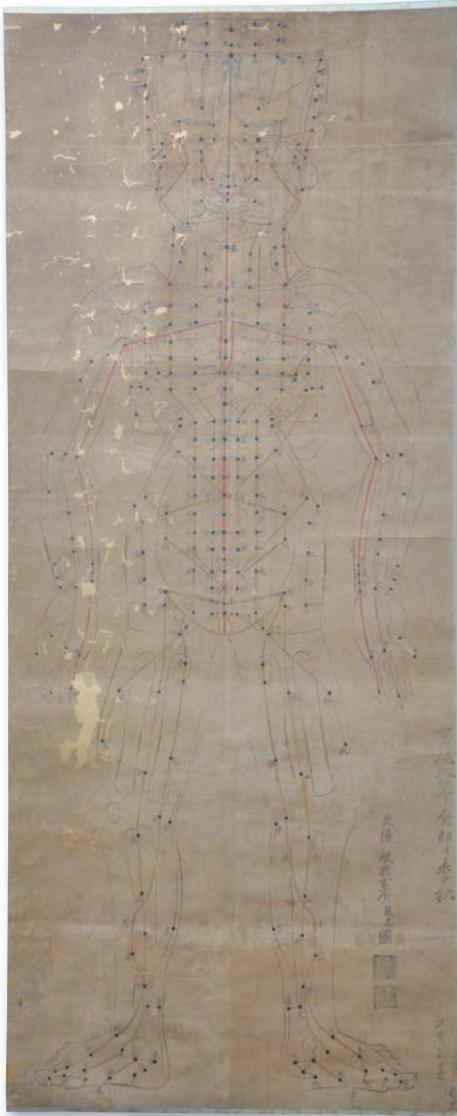


基本情報 ■作者：服部玄廣(生没年不詳) ■年代：享保8年(1723)

■寸法：(軸装)縦187cm 横65cm (本紙)縦124cm 横51cm



この資料のココがすごい!!

江戸時代の漢方医学の身体観に
ふれることができる!

お気に入りポイント

人体の内面を描いた木版を、軸装
して大切に使ってきたことがうか
がわれます。



学芸員
加藤 幸治

学芸員の目

江戸時代は、中国や西洋からさまざまな医術の知識と技術がもたらされ、普及した時代です。そのなかで、人体を描いた「明堂図」や立体模型の「銅人形」がつけられました。人体は人間にとって未知の小宇宙です。明堂とはまさにマイクロコスモスを指す言葉で、医術の教育や施術の実践に使われたものです。



人体は小宇宙

明堂とは

明堂という言葉は、中国古代に帝王がそこで政教を明らかにしたとされる伝説上の建物のことをさす。政治、儀礼、祭祀、教育といった、国家の重要な行事はすべてそこで行われていたのであり、環境と人間の調和を図る重要なポイントであった。このような意味から転じて、星座の名前、人間のつぼの部位などを記した明堂図、道教では体内にある宮殿の名前に派生した。

明堂図とは、中国医学で人体のつぼの位置や経絡(人間の気や血の通り道)を示した図のことである。つぼは人間の体の内側と外側の接点に当たり、体内の病気を治療する場となっている。中国医学において大地と身体が同じ生命体であると認識されていたことが、この明堂図に表れている。明堂図には、人を仰向けにした状態の正人明堂図、うつ伏せにした状態の伏人明堂図、人体を横から見た側人明堂図がある。

日本で独自に発展した漢方医学

日本の漢方医学は、中国の中医学、朝鮮半島の韓医学の知識をとりこみながら発展してきた独自の医学である。人のからだを「気・血・津液」という3種類のエネルギーを運ぶものが体内に流れていると考え、その流れのことを経絡、分岐したり合流したりする場所を経穴とよぶ。そうしたものの流れを良くすれば、心も体も健康がたもたれると考えるのである。

医師は患者の体の状態の触診や生活習慣などの聞き取りによって、「証」という診断を下す。そしてそれをもとに鍼灸や、自然の動植物からとれる生薬を混ぜてつくった漢方薬によ

て、健康な体に近づけていくのである。

明堂図にえがかれているのは、経絡と経穴(人間の気や血の通り道)である。経穴はいわゆるツボであるが、それは人間の身体の内側と外側をつなぐもので、ここから体内の病気を治療できると考えられてきた。

平面の明堂図と立体の銅人形

本資料は、紙に木版で人体を刷り込み、そこに朱で書き込みをしているものであり、当然のことながら平面で表現された人体図である。これに対し、立体の人体模型に経絡と経穴を表したものを銅人形と呼ぶ。多くは木製または張子による紙製であり、現在鍼灸学校等で用いられているものも樹脂製である。にもかかわらず、こうした人形を銅人形と呼ぶのは、初期の教材が銅を素材として高度な工芸技術を用いて製作されたからである。明堂図も銅人形も、ともに漢方医学の教育や知識の普及に用いられたものである。明堂図は、銅人形図と表現される場合もあるが、これはやはり立体のほうが人体をイメージしやすいからであろう。

銅人形は、経穴・経絡のみならず模造した五臓六腑や骨格も付属する。当時の人体に対する知識の粋を極めたものであった。高度な知識を詰め込んだ立体の教科書である銅人形は、高度な工芸技術をもって精巧に製作される必要があった。そして、こうしたものを製作することは、為政者の威信をかけたものでもあったと考えられる。

学芸員 加藤 幸治